

I 実践

1 研究主題

思いやりと助け合いの心をもって活動する児童の育成

2 主題設定の理由

本校は、各学年1クラス20～30人前後の単学級で、全児童162名の小規模校である。児童は家庭的な雰囲気の中で明るくのびのびと学校生活を送っているが、クラス替えもないため、学級の間人間関係が固定化・序列化しがちである。そのため、一度友だち関係が崩れると、学校生活への意欲が低下したり、適応できなくなったりしてしまう。

そこで、人と人のつながりを大切にできるような環境づくりや、受容的・許容的な学級経営を通して、自己肯定感を高め、一人一人がかけがえのない存在であるという人権を尊重する心を育てたいと考え、本主題を設定した。

特に、低学年では、誰とでも仲よく生活すること

中学年では、助け合い、励まし合って活動すること

高学年では、相手の立場や気持ちを考えて行動すること

を目標とした。

3 実践の内容

(1) あいさつ運動への取り組み

ア 児童会縦割り班での朝のあいさつ運動

あいさつの大切さを知り、心のこもった気持ちのよいあいさつができるようにするとともに、児童同士、教師と児童が、あいさつをすることによって心を通わせ、好ましい人間関係をつくることのできるようにすることをねらいとして行っている。縦割り班活動（1年生から6年生までの20名程度のグループ、8班編成）の一つとして、毎月月初め二日間児童の登校時間に実施している。中小路地区コミュニティー推進会の方々も参加してくださっている。



イ さわやかマナーキャンペーンでの活動

「友達や地域の人に気持ちのよいあいさつをしよう」をテーマに、地域へのマナーアップ推進事業の理解啓発と地域のマナーの向上を目指して行っている。11月



1日、学校の正門前の交差点や学校付近の交差点、校舎内で行った。5・6年全児童、計画JRC委員会の児童、本校職員、中小路コミュニティー推進会や駒王中学校の教職員・生徒、日立一高教職員・生徒、日立一高附属中学校教職員・生徒、中小路幼稚園職員、そして中小路小学校PTAの協力を頂き地域が一体となって行うことができた。地域の方々と一緒に、通りを歩く人々に気持ちのよいあいさつをし、地域づくりの一員としての自覚を高めている。

(2) 友だちのよいところを見つける取り組み

学校全体で、「友だちのよいところを見つけよう」という取り組みを行っている。道徳の授業や心のノートを用いて、友だちの個性を見つけ、認め合う活動を行ったり、帰りの会に、その日に見つけた友だちのよいところを発表したりしている。また、友だちのよい行動を付箋に記入し、形に残る継続的な取り組みも行っている。



(3) 異学年交流活動

異学年による集団活動を通して、子供たち同士をつながりや互いを思いやる心を育てることをねらいとして次のことを行った。

ア たてわり班ランチ

(1, 2学期にランチルームにて)

イ たてわり班集団遊び(学期に一度)

ウ たてわり班対抗スーパー鬼ごっこ大会
(1学期)

エ たてわり班対抗ドッジボール大会
(2学期)

オ たてわり班対抗縄跳び大会
(3学期)



4 実践の成果

縦割り班による朝のあいさつ運動では、1年生から6年生まで一緒にあいさつを交わすことで、互いに協力し合う心が育ってきている。あいさつをする側とされる側の両方を経験することで相手の気持ちを考えることができ、あいさつの大切さを感じることができていた。また、上級生がリーダーシップを発揮して、下級生の面倒を優しく見ていた。また、上級生が中心となり、あいさつ運動で使うたすきや旗、あいさつを呼びかける札の準備をし、活動後は実施状況の報告をして次の班の活動へとつなげていった。

さわやかマナーキャンペーンのあいさつ運動では、多数の方々からあいさつが返ってきた。自分からあいさつしてくれる高校生が増え、継続して実施してきた成果が現れているのを感じる。多くの方からあいさつが返ってくると、児童もやる気が出て、大きな声であいさつをすることができた。また、地域の方々と一緒にあいさつをすることで、地域の一員としての意識が高まった。

友だちのよいところを見つける取り組みでは、自分の思いを言葉に表現することで、お互いに認め合い、自分に自信をもてるようになった。また、改めて友だちを見つめる良い機会にもなり、友だちと「仲良くしよう」、「助け合おう」という思いやりの気持ちが一層深まった。

縦割り班活動では、それぞれの活動で高学年が低学年をリードする姿が見られた。たてわり班ランチでは、6年生が中心となってランチルームの準備を行ったり、1年生の教室に迎えに行ってお盆を持ってあげたりと楽しく食べられるように気を配り、片付けも協力して行った。スーパーおにごっこでは低学年の手を引いて並ぶ場所を教え、ドッジボール大会では、ボールがとれない児童に回して投げさせるなど、ゲームを楽しめるようにしていた。

以上の取り組みから、友だちや周りの人と協力し合う気持ちが育まれてきた。思いやりをもち、助け合おうとする児童に成長していくように、これからも継続して実践していきたい。

II 今後の課題

- 1 児童が学んだ一つ一つのことをどれだけ深く受け止め、日常生活の中で生かしているかが難しいところである。学習や体験を通して思ったり考えたりしたその気持ちを、実践化できるようにしたい。そのため、学校教育活動全体を通して、一人一人をよく観察し、褒めて、認めて、励ますことを繰り返し行っていく必要がある。
- 2 今後も、思いやりの心を持ち、相手の立場や気持ちを考えて行動できる児童の育成を目指して、地域や家庭とのより一層の連携が必要である。